

E-13 起居様式決定要因について
三重大学教育 中島喜代子

はじめに 現在の住宅を計画するうえには、一重解決しなければならない問題があり、また、あいなない形では、まりとした解答がなされないまま、個々の判断にゆだねられてしまっていることの1つは、イス座とユカ座の起居様式の問題がある。日本の特殊性として、イス座とユカ座の混合した二重生活の状況があるわけであるが、こうした二重生活の中において、どういふ問題と意味が存在するのかということも考えなければならない。そのことを考えるうえで、起居様式が決定される要因がどのようなものがあるのかということを知ることが重要な問題となってくると思われる。

方法 昭和44年5月に、三重県津市内の新開団地において、2DK, 3DK, 3K, 3LDKのそれぞれをの型について、51件、50件、51件、41件の計193件を調査した。内容は、起居様式、家具、敷物、配器替え、転居前の住宅、現在の住宅、これからの住宅、衣生活、食生活、趣味、興味、家族に対する一般事項の各々についてである。

結果 起居様式を規定する要因は、まず、生活行動の性格によるものがある。これは、動的なものとは静的なものとの差としてみられる。次に、家具の所有の問題であるが、イス座様式には、家具は必要不可欠であるが、一種類の家具を多種の生活行動に活用する傾向がみられ、家具数と完全に一致するものではない。また家具所有は収入とも関係を検討しているし、収入は労働内容とも関係を検討している。また、一番大きな規定条件は、空間である。板の面積によって決定的な影響力をうける。その他要因については、発表時に報告する。